

日本の夏を彩る行事の一つ、夏祭り。金魚すくいや綿菓子などの屋台を冷やかしながら、夏休み中の友達と会ったり、幼なじみと再会したり。

故郷への郷愁や幼い日の記憶と結びつく人も多いことだろう。

8月17、18日。福岡県宗像市にある日の里地区で催された「日の里まつり」は、地域住民による手づくりの夏祭りだ。地元中学校の吹奏楽部などによるステージパフォーマンスや大きなクマの遊具などの子ども向けブース、日の里消防団の消防はしご車による救助訓練や放水パフォーマンス、夜には盆踊りと内容も盛りだくさんだ。

浴衣姿で来ていた小6の女子3人組は「氷みかんやアイスにたこ焼きも食べちゃった。浴衣をお母さんに着付けてもらって、すごく楽しみにしてきました」とニコニコ顔。今年の双子連れのお母さんは「日の里はまつり」と聞いています。

ね。それで、まつりをすれば、新たに来た人同士はもちろん、地域に古くから住んでいる人とも触れ合えるのではないか、

というきっかけから始まつたと聞いています

当時、町内会の役員の多くは30、40代の現役世代。仕事が忙しいなか、資金集めから仕組みづくりまで、全てを新たに構築。「そのエネルギーは、すごい」と古後さんも感服する。

まつり20周年の時の協議会会長の斎藤寛一郎さんは、今年91歳。今もまつりの裏方として活躍し、「まつりの生き字引」と呼ばれている。

「日の里に住んで5年になりますが、まつりは地域、そしてお隣との心の触れ合い、助け合いの場としての意義が非常に大きい。これからも続いている



町内外から多くの人が集まり、祭りを楽しんでいる。10代や20代の若い人たちが自立つ祭りでもある。

## 地域の人と人を繋げ 子どもたちのふるさとをつくる 住民手づくりの夏祭り

日の里まつり  
福岡県宗像市 日の里一丁目団地  
1976年●昭和51年～

# 変わる日本 「暮らし」と「まち」



阿部民子  
text by Tamiko Abe  
illustration by Shigeyuki Sakata

周りの環境がよくて越してきました。今日は人が多くて、びっくり！」とか。他にも、子どもの頃に

日の里に住んでいたという親子連れや隣町に住む親や弟家族と来ている人など、近隣全体で愛されている祭りなのがよくわかる。

出店も地域からの参加が多い。その1つが、保護者有志による「日の里西小パパの会」の屋台だ。代表の木嶋直也さんは「コロナで活動を休止していましたが、メンバーを再招集して再開しました。売り上げは親子イベントの予算になります。みんなの笑顔が、うれしいですね」と話してくれた。

まつりを取り仕切っているのは、日の里地区の自治会で構成される「日の里地区コミュニティ運営協議会」だ。まつりは、その中の「日の里まつり実行委員会」が主催している。協議会会長の古後澄雄さんに、日の里まつりの経緯を伺った。

「まつりが始まったのは、昭和51年。コロナで2年休みましたが、それ以外は毎年開催して、今回で47回目を迎えます。当時は、日の里団地の入居開始からちょうど5年が経ち、急激に人口が増加した時期。隣人とのつながりも希薄だったんですね。この広場である。

まつりがあるのは、福岡市と北九州市のちょうど中間にある宗像市の西部。1970（昭和45）年、日本住宅公団（現UR都市機構）により、西日本随一のベッドタウンとして開発された。地域内には九州最大級の規模を誇る日の里団地やJR東郷駅前の日の里一丁目団地がつっているのは、日の里一丁目団地となる。日の里まつりのメイン会場となっているのは、日の里一丁目団地内の広場である。

日の里地区の自治会で構成される「日の里地区コミュニティ運営協議会」だ。まつりは、その中の「日の里まつり実行委員会」が主催している。協議会会長の古後澄雄さんに、日の里まつりの経緯を伺った。

「まつりが始まったのは、昭和51年。コロナで2年休みましたが、それ以外は毎年開催して、今回で47回目を迎えます。当時は、日の里団地の入居開始からちょうど5年が経ち、急激に人口が増加した時期。隣人とのつながりも希薄だったんですね。この広場である。

1992、93年にピーカに達して以降、減少傾向にあった。しかしここ数年、URによる団地の集約での新たな宅地造成などにより、子育て世代も増えているという。

「URによるニュータウン建設があつたからこそ、日の里の今があるといつても過言ではありません。このお祭りでも、場所の提供を始め、住民の方々の協力などURの多大な協力があつてこそ、と感謝しています。日の里まつりは、町を活性化していく重要なイベント。今後も日の里のコミュニティ全体へメッセージを発信し続け、心豊かな縁づくりをするためにも、魅力的なコミュニティをつくりたいですね」と古後さん。

先人たちから引き継がれた、まちを愛するモチベーションとコミュニティ。そのエネルギーが昇華されれたまつりの記憶は、子どもたちの心にも深い郷土愛として刻まれることだろう。

街に、ルネッサンス



UR都市機構

[企画制作]新潮社

○「まつり」で人と人を繋ぐ